

かたりべ 75

豊島区立郷土資料館だより



日本鉄道豊島線はなぜ池袋駅から分岐したか

日本の近代化の一環として鉄道が敷かれる時、地元による反対運動は日本各地で見られた現象です。日本鉄道株式会社の上野―赤羽間の路線と、品川―赤羽間の路線とを東京近郊で連絡させることを目的として計画された、日本鉄道豊島線（現山手線の一部）が敷設される時も、目白駅での分岐から池袋駅の分岐へと計画変更されたのは、地元の反対運動がその理由のひとつである、と言われてきました。しかし、現在当館で開催している企画展「えきぶくろー池袋駅の誕生と町の形成」の展示資料から、別の理由を探り当てることができました。

上の地図をご覧下さい。これは一九二五（大正一四）年の地図を合成したものに、一連の豊島線の計画を書き入れたものです。これを見ると、路線変更のポイントのひとつは、当時の巣鴨監獄（のちの巣鴨プリズン、現在のサンシャインシティ）の存在であったことがわかります。①は一番最初の計画線で、日本鉄道が最初に鉄道免許を申請した時のものです。田端駅から西側方向へほぼ一直線に引かれ、現在のビックリガード付近で分岐する線ですが、これだとわずかに巣鴨監獄の敷地を横切ることになります。そこで、次に計画されたのが②です。これだと巣鴨監獄の敷地を横切ることはありませんが、南角の近くを通ることになります。それで池袋駅から分岐する現在の路線（③）が採用されることになったのです。

路線変更にあたって、その理由は明示されていません。ただ、目白駅分岐からの変更にあたっては、将来の拡張性のある平坦地ということで池袋駅分岐になったということが明記されています。つまり、すでに存在していた巣鴨監獄との位置関係、そして、将来を見据えた駅としての拡張性という二点が、池袋駅分岐を決めた理由と理解できるのです。

（伊藤）

豊島をさぐるその9 すすきみみずくの実像に迫る

今年四月、豊島みみずく資料館が区立南池袋小学校内にオープンし、夏休みには飯野徹雄名誉館長による特別講座が開かれ大盛況でした。この講座で学んだことをきっかけとして、豊島区雑司が谷地域の郷土玩具として有名な「すすきみみずく」を、ミミズクの生態や環境の面から考え、その実像に迫ってみたいと思います。



すすきみみずく

ミミズク？フクロウ？

「すすきみみずく」には、しっかりとした耳がついているから「みみ(耳)ず(付)く」と思うかもしれませんが、実際のところはどうかのでしょうか。豊島区ではすすきみみずくのみならず、池袋駅の「いけふくろう」も知られています

し、区内各所にはミミズクとフクロウがあふれています。両者の違いは一体何なのでしょう。専門的な用語で言えば、ミミズクとは、「フクロウ目フクロウ科」の鳥のうち、飾り羽である「羽角」を持つもの。つまり、ミミズクと称されるものは、フクロウの一種で耳に見えるのは実際には羽毛の突起なのです。ただ、シマフクロウという種類は、羽角があるのにフクロウと呼ばれていますし、逆のパターンもありますので、一概に羽角があるからミミズク、とは言えないのが本当のところのようです。ヨーロッパではミミズクとフクロウを区別していませんし、両者はフクロウ類という大きなくりのなかで考えた方がわかりやすいかも知れません。

本物のミミズクは？

すでに紹介した飯野名誉館長の推測では、雑司が谷地域のすすきみみずくはモデルとなったのは、従来日本で一般的に見ることのできたオオコノハズクという種ではないかということです。すすきみみずくは、今からおよそ二五〇年ほど



オオコノハズク
(平凡社刊『世界大百科事典』より転載)

前、江戸時代中期ごろから作られていたようですが、雑司が谷地域では江戸時代はもちろんのこと、一九七〇年代頃まではミミズクが生息し、その声を聞くことができたそうです。現在では都市化によってミミズクのすみかである森林が失われ、その姿を見かけることは稀になってしまいました。

さて、かわいらしい「すすきみみずく」の姿からは想像できませんが、ミミズクは肉食で、ネズミなどの小動物を捕獲して食べるいわばハンターです。また、ミミズクというと、月夜に樹木に留まってだんまりとしているイメージがあるかも知れませんが、実は渡り鳥で、季節の変化によって大陸に渡るといふアクティブな鳥なのです。明治九(一八七六)年の新聞には、本郷湯島天神町(現在の文京区湯島二丁目)でミミズクが三匹のネコと闘い負傷した、という記事を確認できます。ミミズクは猛禽であり、また

東京でも日常的にその姿をみることがで

きたことがわかります。

すすきみみずくの「ススキ」

この郷土玩具の材料となっているススキは、もともとは地元産のものを使用していました。かつての雑司が谷地域には弦巻川が流れ、その両岸にはススキが自生し、どこの農家や茶屋でもすすきみみずくを作っていたそうです。しかしながら、弦巻川は、一九三二(昭和七)年に暗きよ化工事によってその姿が地上から消えてしまい、さらに雑司が谷地域が次第に宅地化され、ススキの生い茂った野原も無くなってしまいました。地元で入手していたススキも、今では全国各地から取り寄せなければならず、その入手が大変困難なようです。そのうえ、作り手も急激に減少し、現在ではすすきみみずくを製作販売している店は、わずか一軒のみとなってしまいました。

すすきみみずくの歴史は、そのまま豊島区の都市化の歴史と重なり合う部分があります。すすきみみずくを通して、今後の豊島区のあり方を考えさせられました。



◆◆◆◆◆
豊島みみずく資料館(土・日のみ開館)

所在地 豊島区南池袋三十一八―一二

連絡先 ☎三九八三―二八七二

連載「職人と地域の歴史」(4)

シマジ“を利用

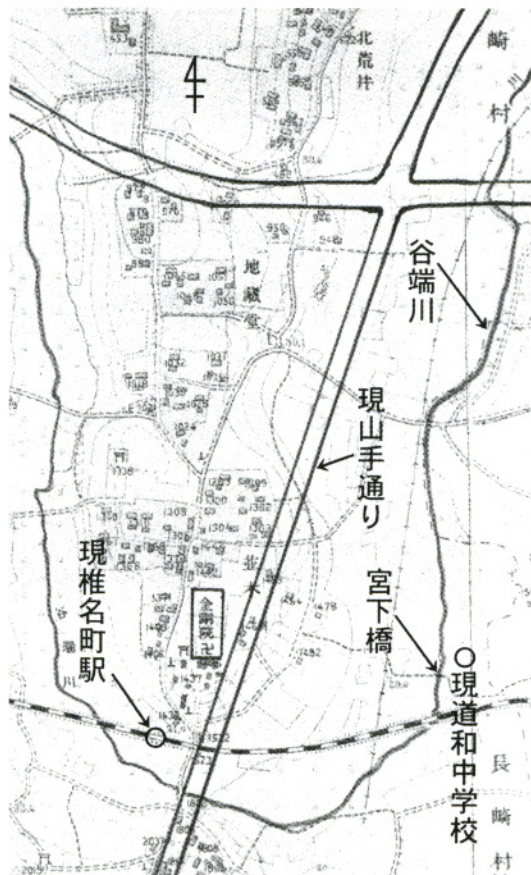
―長崎地域・植木屋―

駒込・巢鴨地域が、江戸時代中期から明治期にかけて花卉と植木の生産地だったことはよく知られています。しかし、近代以降の都市化とともにその面影は次第に失われ、現在では山手線駒込駅の土手のツツジの植栽が、当地の歴史を伝える稀少なものになっています。ここでは、大正期から昭和初期の長崎地域の植木屋の特徴を紹介し、近隣地域との関係を見ることとします。

◆“シマジ”という挿し木の適地

現在、谷端川南緑道に架かる橋に宮下

橋(西池袋四丁目・道和学校西)があります。宮下というのは、かつて呼び習わされていたこのあたりの地名のことです。一九一(明治四四)年、椎名町駅そばの金剛院近くで生まれ育った男性の幼年期から青年期にかけての見聞によれば、この付近一帯は湿地帯でした。当地ではそのような土地を“シマジ”と呼びます。表記すれば「島地」かも知れませんが、そこでは米や麦を作るのではなく、また、野菜の栽培をするのではなく、カナメ・スギ・ヒノキのような樹種の挿し



植木栽培の頃 標高は集落付近が約33m、宮下橋付近が29m。(大正5年、1万分の1地形図参照)

木をしていました。それを行っていた家は宮下付近の植木屋で、一軒や二軒ではなかったということです。湿地帯であった当地は、夏の早魃の時に水気が保たれ、挿し木の根付きがよいという土壌の特性が利用されていたのです。そして、挿し木後、ある程度まで育てると、現在の川口市安行や鳩ヶ谷市の植木屋がそれらを買いにきたということです。ひとくちに植木屋といいますが、ここに、栽培・育成過程での分業があったことがわかります。

◆“長崎村植木屋中”の石碑

金剛院には、表面に「大正元年十月吉日 弘法大師縁日記念 長崎村植木屋中」と刻まれた石碑があり、背面には四〇名程の長崎村の人名がみられます。ここに記されている植木屋の仕事の具体的なことは現在調査中です。

かつては、四月になると今よりも広かった金剛院の境内(戦前期の山手通り開通で縮小)では植木市が開かれ、賑わったということを聞きます。石碑背面の長崎の人々の名前に並んで刻まれている「安行植木屋中」という文字が、両地域のつながりを伝えています。

◆栽培技術と生産地

湿地帯という挿し木に適した土地があ



長崎一丁目 金剛院境内

っても、稲作・麦作・野菜栽培とは異なる技術がなければ、植木の栽培はできないでしょう。先の男性によれば、駒込の明治期の著名な園芸家である伊藤重兵衛や園芸植物の輸出入を目的とした横浜植木会社が、シマジでの栽培状況をよく見ていた光景が目に残っているといえます。すでに土地の宅地化が先行していた駒込地域では植木栽培をやめ、長崎地域に移行していたのでしょうか。それとも、それ以前に、植木栽培をめぐる両地域には関係があったのでしょうか。

駒込地域が台地上に位置するのに対して、宮下(長崎地域)が湿地帯であるという点は、その関係を紐解く要素ではないでしょうか。生産技術は、世間の需要により必要とされ、近隣地域との関係のなかで高められ、生かされていくという視点にたち、植木屋という職業を、隣接する両地域の関係から考えたいと思っています。

(福岡)

Q

昔の地番がわかっていて、それが今の住所のどこに該当するのか調べる方法がありますか？

(質問者 ななえ)

~~~~~

A

一九六二(昭和三七)年五月、「住居表示に関する法律」が公布され、それまでの地番による住居表示にかえて、家屋に番号をつけて住居を表す新方式が全国の市街地部分で実施されることになりました。地番(下写真参照)は、町や丁目の表示が様々で、規模の大小の差があったり、区域が入り組んでいたりと、数字順にならない場合がしばしばあったり、欠番・飛番があったり、枝番が不規則であったりして、土地に馴染みのない人にはたいへんわかりにくくなっていったのを改めるというのがその目的でした。

豊島区では、一九六三年の段階で、区全域で新住居表示への切り替えを五カ年計画で実施することが決まり、その第一次として六四年十一月一日から旧椎名町・長崎地区を対象に実施され、以後、順次全区におよんでいきます。

この過程で、住民の中から、慣れ親

しんだ町名がなくなることへの反発や、新しい町名への疑問、区域分けについての異論、そして事業の進め方などについて意見が続出、訴訟にまでなり、法律の一部改正が必要となるなどの事態まで生じました。そのため、当初予定していた五カ年間の実施は大幅に遅れ、最後になつた旧早町・要町・高松・千川町地区での新住居表示施行は一九八九(平成一)年十一月のことでした。

さて、お尋ねの昔の地番から現在の住居表示を調べる方法ですが、豊島区の担当部署では、新住居表示を実施する際にそれぞれの「旧→新」および「新→旧」の対照表と対照地図を作成していますので、まず、これによって調べることができます(郷土資料館でも所蔵しています)。ただし、この方法では住居表示施行当時に住居や事業所のあったところでない」と調べることはできません。そういう場合は、当時の地図と現在の地図を対照させたり、近隣の地番からおおよそのところを推測することになります。

また、明治期以後の豊島区の地番は、字名の変更や、旧四町村(長崎町・高田町・西巢鴨町・巢鴨町)が一九三二(昭和七)年に東京府に編入され豊島区にな

っても基本的には変わっていないのですが、例外がいくつかあります。

一つは、旧長崎村での大正期からはじまる耕地整理にともなう、一九三九(昭和一四)年の町界・町名・地番の変更です(板橋区との境界変更による地域を含む)。この場合は、それ以後の地番からは、対照表・地図によ

って新住居表示を調べることができませんが、

それ以前の地番からは調べることができません。もう一つは、一九

五六(昭和三一)年と六〇年に行われた池袋駅東口の区画整理実施にともなう町界・町名・地番の変更です。こ

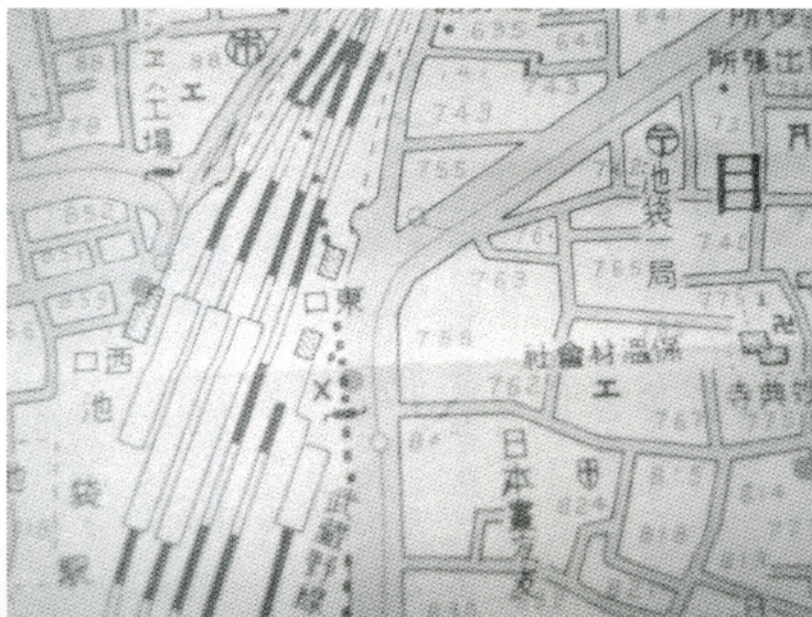
のため、現在の東池袋一〜三丁目と南池袋一〜四丁目にかかる地域では、旧長崎村での耕地整理時と同様に、一

九五六・六〇年以前の地番から調べることは

できません。

こうした場合は、何段階かの資料をつなぎあわせて、調べていくことになりますが、煩雑な作業になりますので、かえって、地番の入った当時の地図と現在の地図とを対照させて、おおよその番地を調べた方が早いかも知れません。

(回答者 あおき)



1933年発行「豊島区詳細図」の池袋駅付近

# セピア色の記憶

## 第10回 「ご存じ地蔵通りは今も昔も大賑わい」

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した昭和二十六年（一九五二）と現在（平成一六年八月一四日）の巣鴨地蔵通り商店街の様子です。地図に示した\*印は撮影地点を、↓は撮影方向を示しています。



上の写真では木造平屋もしくは二階建ての商店が軒を連ねているのに対して、下の写真では三階建て以上のビルが主流



となっていること、また、上の写真では和服を着用した人が圧倒的に多いこと、などが指摘できます。

ご存じのように、とげぬき地蔵で知られる高岩寺への多くの参拝者が巣鴨地蔵通りの賑わいの根源であり、これは最近になって始まった現象ではありません。もともと江戸の下谷車坂町（現台東区）に所在し信仰を集めていた高岩寺が現在

地へ移転したのは、明治二十四年（一八九一）のことです。巣鴨への移転後も信仰が衰えることはなく、大正一二年（一九二三）の縁日の際には、大群衆によって死亡事故まで発生したことが同一四年発刊の『巣鴨総攬』に記されています。また、昭和二十六年発刊の旧版『豊島区史』には、高岩寺の縁日（四の日）の様子について、「当日は市内及び近郊から参詣する人多く、（中略）旧中仙道は人に埋まる繁昌振りは水天宮、深川不動尊の縁日と並び称せられている。」と記されるなど、現在よりもむしろ以前の方がより混み合っていたと考えられます。



さて、川添登編著『おばあちゃんの原宿 巣鴨とげぬき地蔵の考現学』（平凡社、一九八九年）には、地蔵通りの通行人について、いくつもの興味深いデータが掲載されています。例えば、昭和六二年（一九八七）三月四日（土）の縁日の日、午前十一時から一二時にかけて巣鴨駅方面からとげぬき地蔵方面に向かう人は、四三%がおばあちゃん、三八%がおばさん・おねえさん、一七%が男性、二%が子供、一方、同じ日の午後一時から二時、とげぬき地蔵方面から巣鴨駅方面に向かう人は、三五%がおばあちゃん、三三%がおばさん・おねえさん、二二%が男性、一〇%が子供、というもの。また、とげぬき地蔵境内で参拝者が立ち寄ったのは、水盤二二%、香炉八八%、賽銭箱四%、本堂八六%、お守り売場二六%、子育て地蔵一七・五%、小僧稲荷三五%、水洗い観音五七%、といった具合です。

右の記述からは、本堂には立ち寄るものの、賽銭箱を素通りする「おばあちゃん」像が浮かんでしまいますが、実際のところはどうかのでしょうか？ この調査データは、今から二〇年近く前のものですので、そろそろ再検証が必要かも知れません。

（秋山）

# 郷土資料館からのお知らせ

★歴史講座「江戸切絵図をあるく」開催  
のお知らせ

〔以下、回数、開催日、内容の順〕

① 10月30日 ガイダンス

② 11月6日 護国寺・雑司が谷方面への  
フィールドワーク

③ 11月13日 駒込・巣鴨方面へのフイ  
ルドワーク

※時間はいずれも14時00分～16時00分

※講師は原史彦氏〔東京都写真美術館学  
芸課学芸係長〕

※保険料として三〇〇円、テキスト代と  
して二〇〇〇円をいただきます。

※申し込み方法については、『広報とし  
ま』10月5日号をご覧ください。

★「空襲体験画」募集のお知らせ

来年は、アジア太平洋戦争が終結して  
六〇年目にあたります。資料館では、豊  
島区が空襲によって大きな被害を受けた  
六〇年目の日にあたる二〇〇五年の四月  
一三日前後に、「空襲体験画」の展示を  
計画しています。そこで、区民の皆さま  
をはじめ多くの方々から、ご自分の空襲  
体験を絵にしたものを現在募集していま  
す。なお、応募作品は、当館で永く保管  
し、原則としてお返しいたしません。  
詳しい応募要項は当館で配布していま  
すので、それをご覧くださいご応募くだ  
さい。

区民のための  
博物館用語の基礎知識

⑥ レプリカ〔英 replica〕

複製品・模造品のこと。資料を展  
示公開することは、照明や埃の影響  
等で資料の劣化に直結する。それを  
避けるため、たとえ原資料を所蔵し  
ている場合でも資料を忠実に再現し  
て複製を作り展示する場合がある。  
もちろん、原資料を所蔵していない  
が展示効果上必要なため、レプリカ  
を製作し、展示する場合もある。

▽用例△

学芸員A「展示してある古文書のレ  
プリカ結構うまく作ってあるね。」

学芸員B「本物より古文書っぽいと  
思うんだけど。」

学芸員A「それって、いいのかな？」

## 編集後記

暑かった夏は五輪の閉幕とともに  
終わりを告げたようです。ところで、  
五輪開催中は泥棒の発生件数が少な  
いとのこと。これだけ聞くと、泥棒  
が熱心にテレビ観戦している姿が目  
に浮かびますが、実際には、在宅率  
が高く深夜までテレビ観戦をしてい  
るため空き巣に入りづらい、という  
のがその理由のようです。

八月下旬より、鬼子母神コーナ  
脇に閲覧スペースを整備し、来館者  
にご利用いただいております。ただ  
し、当館発行の刊行物や、当館所蔵  
の書籍を閲覧する場合のご利用に限  
ります。静かな読書「スペース」で  
はありませんので、悪しからず。

(あき)

かたりべ  
No.75

2004年9月1日

豊島区立郷土資料館  
豊島区西池袋2-37-4

電話 03-3980-2351  
http://www.museum.  
toshima.tokyo.jp